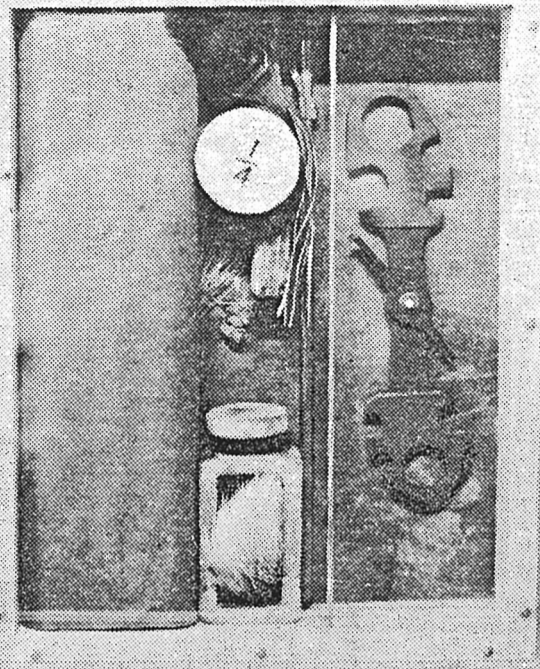


文化



BOX83-3 (オブジェ)

幻想的な世界へ

「永津 禎三個展」をみて

喜久村 徳男

で催されている永津禎三の個展は必見に値する。彼はことこの四月、来沖一カ年を期して県民ギャラリーで過去七年間の経過を見せてくれた。そこには、彼の現在に至るまでの神経質なまでの自己探究があった。中世キリシタンに由来する「オブジェ」は、彼のタプロールはドイツの作家、トーマス・ヤンセンのタッチに似たところもあるが、ヤンセンの膨大なデフォルメとは異なり、解体されながら反復していく流動的フォルムは一種のリスティックな感じがした。タプロール作家としてのオブジェは、やもすると「洗練」される。彼のオブジェは、見る者に一種の「洗練」を促す。それは、見る者に一種の「洗練」を促す。それは、見る者に一種の「洗練」を促す。

昨今は県内の絵画展もかつてない程の全盛期を迎えている。絵画人口の増加と制作欲の現れであり、おおいに活発化したものである。しかし、いまひとつインパルスに弱く、余韻に浸る機会もなかなか少ないものである。

沖繩という地理的条件の中で、親しく団体的状況から鮮烈さを欠いていく現状も否めないだろう。しかし、独断的な作家個々に鋒先を向けることは、大きく二つに分けられそうである。表現の厳しさを身にこめこめしている作家と、その点でも、画廊に

スト教への、また曼陀羅への探りもあつた。さらには、石塊であったり、昆虫の抜け殻であったり、一片の枯れ葉であったりした。そして絵の具の素材そのものへの執着も、まざまに試みた発表であった。

今回の個展もそこからの延伸、奥の部分で永津のオリジナリティに仕上がっている。味をひいた。それは版画、デ

種の遊びの危々を伴うものだが、永津の場合それが無い。有機的物体と無機的な物体との重なりは、タプロールとの相通するものが伝わってくる。それは色彩の雰囲気から、面もあるだろうが、もっと深奥の部分で永津のオリジナリティに仕上がっている。味をひいた。それは版画、デ

織り成す人体、さらには幼児期体験のノスタルジックな片角から未知の空間へと広がっていく。ついでに「Genetics」をあげた。

現在の様式になってから四年くらいになるようであるが、タプロール以前の仕事も興味をひいた。それは版画、デ

全体的印象として中世的世界を感じるが、その問いに、彼は「その意識はないが、中世は好きだ」と答へ、さらに「自分は、日本特有の『雰囲気』的感性は大切にしたい」とも付け加えた。

今回の個展は小品群の小規模ではあるが、作家の制作姿勢を見せてくれた点でも有意義な作品展である。

(同展は23日まで)

(画家)